



# 高齢化に向けての親のおもい

兵庫県 あゆみの里家族会 会長 呉 珀華氏

あゆみの里は、神戸市西区にあり、入所者六十三名、通所十二名、合計七十五名で、全員が生活介護利用者です。今回の話題提供として、家族の意見や要望をまとめてみました。

「施設が終の住処となつてほしい」「利用者が高齢化していくうえで、それに対応した送迎や緊急時のショートステイ利用を希望する。また、親の思いとして、「施設が終の住処となつてほしい」「利用者が高齢化していくうえで、それに対応した送迎や緊急時のショートステイ利用を希望する。」

「親の死が利用者に与える影響が心配」など、私たち親にとつて不安もでてきました。介護サービスとの連携では、高齢者介護サービス事業と障害者支援サービスのセッ

たを望み、施設が一体的にコーディネートできることを希望します。あゆみの里は二〇一〇年に親亡き後のために親から子へのラブレターとした「きずなノート」を作成し、親の思いを後に託す書き込み式ノートを出版しています。

# 我が事・丸ごとの

## 目指すもの

埼玉大学教育学部准教授 宗澤 忠雄氏

○我が事・丸ごとの源流は、介護保険制度と「新しい公共」

四名の発表者の方の、障害のある人の姿、実態、ニーズ、これが議論の出発点です。サービスの在り方や施策というものと、出発点は障害のある人の現実、暮らしの現実、本心に寄せかどうか。

政府は細々としたサービスの報酬改定を毎年やられているが、障害のある人の暮らしやこれからの生活がどういう方向にむかうのかさっぱり見えてきません。

その結果、あまりにも目に余るサービスの劣悪さがあり、この四月から事業者の要件が改定されました。不適切な支援や虐待があり、改善指導のほとんどは、放課後デイサービス事業所であつたと聞いています。

内容に基づき私たちが実践に取り組む手引きであります。支援メンバーが自分たちの支援を組み立てる手引きとなるものをつくろう。これを皆さんに活用していただきたいのです。

これは今未曾有の不動態にあり、少子高齢化で人口が減っています。古くは不動産物件には人が入らない状況です。そこでグループホームを売り込む業者と、何の専門性も持たない事業者が参入しています。

これが一言言うなら「我が事・丸ごと」です。このことについては、六十五歳問題の中で共生型サービスの基準、報酬の設定、それは六十五歳になつたら介護保険を使えといっているのです。

今もう一度公共性のあるサービスと地域生活を私たちの障害のある子どもたちが送れる二十一世紀の地域社会を耕し直さなければならぬ。そのための指針としての提言IIを仕上げたいと思っています。

# どうする？ 家族とわが子らの高齢化

## 全国大会・全員参加型討論会

### あかりの家の施設づくり

自閉症成人施設・障害者支援施設あかりの家 施設長 三原 憲二氏

あかりの家は、自閉症の子を持つ三人のお母さん方の呼びかけでつくられ、三十三年を迎えます。四十名の定員で、療育手帳Aが三十九名、B1が一名(自閉症の人が九割)利用しています。

開園から三十三年が経過し、高齢化に伴ういろいろな課題が生じています。例えば、週末は二泊三日家に帰れたものが一泊二日の帰宅となり、また通院も増えています。

週末帰宅、行事の見直し、身体的老化、介護支援、医療的な付き添い、さらには、親がいなくなるという認識をしっかりと伝え、これからの人生を組み立ててあげることが施設の責任であります。

施設が目指すものとして、働くことを重要視、全員何か一つの仕事に就き、自閉症専門のグループホームとあかりの家を一体的に正職員によって運営しています。

六十歳を過ぎ、全員が働くことができなくなると当然就労もできないですし帰宅する人は若い人に限られるのです。つまり介護的、余暇的な支援が増えるという事です。働いて買い物をする楽しみや健康への支援、作業の見直しなどが必要になります。



約六百名の参加者で全員参加の討論会

### 第二田川学園の支援体制

福岡県 第二田川学園 保護者会 会長 奥 昭義氏

学園の支援体制について、施設・家族会との話し合いの場を随時設けながら施設処遇改善に取り組んでいます。この報告にあたり、家族会

員にいくつかのアンケートを実施しました。施設の運営等についての満足度では、大変満足、満足と答えた方が五七・一%と過半数を超えました。やや不満、不満と回答した方も四二・九%と厳しい意見もありました。

家族として大切なことは、十年、二十年後を見据え、身体認知機能の低下を予防し、生活の質の向上と安心、安全、快適な暮らしを支えるため、家族と施設が一丸となって支援体制を見直し、向上させていくことです。



田川学園では、先進事例に学び、人員配置の増員(理学療法士・生活支援員の夜勤体制・看護師の三人体制など)を行っています。利用者の重度化、高齢化を見直し、看取りを行うことも視野に入れていきます。

介護保険制度とは、みんなでお金を出し合い市町村単位に保険会計を赤字にしない。サービスを増やそうとしたら保険料は上げますよと、そういう助け合いの事です。障害者の方も助け合いの世界に移ってくださいます。次に、新しい公共は、放課

# 施設のあるべき姿

社会福祉法人陽気会 総合施設長 松端 信茂氏

陽気会ひだまり園は、最年少3歳から最高齢88歳までの方に利用いただいています。全施連の「安心・安全・快適な暮らしの場」は、とても素晴らしいキーワードと捉えております。開設60年を迎えるにあたり、同じ考え方をもち施設運営に携わっています。児・者併設型(児童施設での年齢超過者をうけいれる。)で平均年齢は70歳です。3階建てで、1階を障害者支援施設、

## 施設協会との両輪の関係

その顔ともいえる高齢障害者の介護施設ひだまり園は、定員26名で完全個室制、各部屋にトイレ、洗面所が付属されています。どの部屋からも建物中央に位置する中庭が一望でき、リハビリ庭園・療育庭園としての機能を有しています。

また、広い空間でゆっくりと食事をしていただける食堂・デイルームが設けられ、浴室には特殊浴槽2台(車いす対応・ストレッチャー対応)が設置されています。

従来の定員60名陽気寮を定員30名の個室化と、グループホームを10か所32名が生まれ、全員就労しています。全体で看護師4人体制をとっており、施設内で栄養点滴、痰の吸引等の処置を行うことができ、施設における在宅医療の見取りが可能となりました。

これからも、施設の存続をかけた改革、あるべき姿の具現化を図り、現行施設を新しい施設へと転換するネットワーク化したいです。

## 会場からの意見・要望

その一部を紹介します。措置から契約の時代、矛盾を感じているが、契約の例が他の国ではどうなのか(岐阜)

契約制度からの成年後見は親が延長で契約をしている場合が多いと思うが、後見人として正式に後見人手続きをとっているかの実態を知りたい(兵庫・神奈川)

障害者総合支援と介護保険との統合は現在どうなっているのかを知りたい。(兵庫)

利用者の完全個室化について、最重度の人を個室に入れるべきではないと思うがどうか。(対応など)(福岡)